

「夜の寢覚」語彙論的考察

二十五回生 濱田尚子

目次

序論

第一章 全体の語彙

第一節 言語量について

第二節 異なり語数と文章の性格

第三節 延べ語数からみた描写態度

第四節 主要語彙について

第二章 動詞の語彙及び語法

第一節 語数について

第二節 活用形について

第三節 音便形について

第四章 使用度数と主要語彙

第三章 名詞及び形容詞の語彙

第一節 名詞について

第二節 形容詞について

結論

補注

参考文献

序論

現存する古典作品は、その文学的価値については言うまでもなく、語学的にも非常に貴重な言語資料として興味あるものである。

本稿では、菅原孝標女の作と推測される「夜の寢覚」を取りあげ、この作品に語彙論的な調査並びに考察を加える事によつて、作品の個性及び作者の執筆態度を探つていきたい。また、一作品の語彙を詳細に調査分析する事によつて、今後の語彙論の体系確立の為の一資料を提供したいと思ふ。

猶、調査は、阪倉篤義他編「夜の寢覚総索引」に拠つた。この索引は、現存の伝本類で最古とされている松平文庫所蔵の一本を底本とした日本古典文学大系「夜の寢覚」に即して編まれており、調査資料としても信頼性は高いものである。

第一章 全体の語彙

第一節 言語量について

日本古典文学大系「夜の寢覚」に使用されている自立語

<表 1> 自立語総数(延べ語数)比較表

作品名	延べ語数	寝覚との比	備考
夜の寝覚	44.093	100	
落窪物語	27.224	61.7	江口先生の御調査による
竹取物語	5.124	11.4	宮島氏の御調査による
源氏物語	207.808	471.3	同上
枕草子	32.906	74.6	同上
徒然草	17.114	38.8	同上
紫式部日記	8.737	19.8	同上
更級日記	7.243	16.4	同上

の総数は、四四、〇九三語である。この言語量を他氏の調査による他作品と比較すると、表1のようになる。この表からも明確なように、超大作「源氏物語」を別にすれば、「夜の寝覚」(以下寝覚と称す)もかなり大きな作品であると言える。

第二節 異なり語数と文章の性格

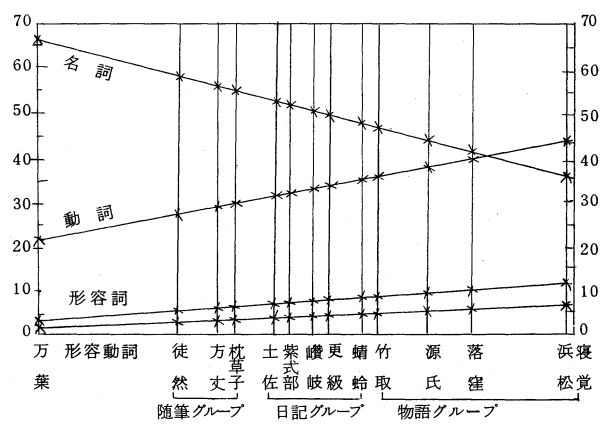
大野晋氏によれば、ある作品の文章性格は、その作品に使用されている品詞別異なり語数の比によって、ある程度知る事ができる。

寝覚に使用されている異なり語数は五、〇〇五語、その

<表 2> 品詞別異語数百分比表

	名詞	形容動詞	形容詞	動詞	その他	全体
語数	1,806	318	420	2,204	257	5,005
%	36.1	6.4	8.4	44.0	5.1	100

<図 1>



品詞別比率は表2の通りである。この比率を大野氏、伊牟田氏、稻賀氏、江口先生の調査された各作品の比率を図式化したものに組み込んだのが図1である。

図1から大野氏の説に従えば、寝覚は物語グループに入り、氏が「描写敘述に詳細を極め」といっているとわかれた源氏

<表 3> 品詞別延べ語数百分比

	名詞	形容動詞	形容詞	動詞	その他	全体
語数	14,687	1,954	4,665	17,368	5,419	44,093
%	33.3	4.4	10.6	39.4	12.3	100

物語より更に、描写や敘述が細やかになつてきていると言える訳である。更に興味ある事は、同一作者の手に成るとされてゐる寢覚と浜松中納言物語とが、他作品とは離れた位置で非常に接近している事である。この事は、決定的な証拠とはなり得ないにしても、作者類推の一つの手懸りとはなり得よう。

第三節 延べ語数から
みた描写態度

文章の表現性を追求するという観点から言えば、異なり語数よりも延べ語数について分析する方が妥当性が強いと言える。次に示した表3は、延べ語数の百分比である。

樺島忠夫・寿岳章子両氏は、名詞Nの比率及びMVRと
いう数値を算出する事によつて、文体の傾向を知る方法を
説かれている。

MVRとは氏の説明によれば

$$MVR = \frac{\text{形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の数(MD)}}{\text{動詞の数(V)}} \times 100$$

という式で表わされ、その値が大きければ「ありさま描写的」であり、小さければ「動き描写的」であると言え

<表 4> N及びMVR比較表

	万葉	古今	後撰	伊勢	竹取	土佐	蜻蛉	紫式部	更級	枕草子	徒然	方丈	源氏	大鏡	寢覚
N	53.0	53.1	50.9	49.3	45.0	49.8	40.7	52.5	46.8	44.2	49.5	51.8	41.6	53.1	33.3
MVR	33.1	32.1	33.6	36.6	36.7	44.2	53.8	67.8	53.9	69.6	54.7	58.9	76.2	57.3	66.8

である。

またNについては、その比率が大きければ「要約的文章」と考えられ、小さければ「描写的文章」であると考えられる。

この二つの数値を組み合わせ、他の作品と比較する事によつて、その作品の文体・表現の傾向を知る事ができる訳である。表4は、古典対照語い表で調査されている作品についてNとMVRを算出し、寢覚の調査結果と比較したものである。

この表によると、寢覚のNの値は三三、三で非常に小さく、MVRの値が六六、八で他作品に比して大きい事がわかる。

つまり、この作品は非常に描写的な文章である上に、「ありさま描写的」な文章傾向を示している訳である。この事は先にも異なり語数の考察によつて得た「描写・敘述が細やかである」という結果を更に補強するものである。

的」であり、小さければ「動き描写的」であると言えるの

第四節 主要語彙について（略）

第二章 動詞の語彙及び語法

第一節 語数について

動詞の語数は、先に示したように異なり語数二、二〇四語（44.0%）、延べ語数一七、三六八語（39.4%）である。この比率は他作品に比して高い事も、前述の通りである。

この語数を活用の種類別にみると、やはり四段活用が最も多く使用され、異なり語数で全動詞の59%、延べ語数で50%を占めている。次に多いのは下二段活用で、寢覚の場合、他作品に比してもその比率が高い。

また、平安時代に上代の四段活用が次第に下二段活用に变化定着したとされる語の中で「乱る・忘る」の二語に古く活用の四段活用が残っている事がわかった。

「乱る」の場合、下二段活用が五二例、四段活用が八例見える。しかしこの八例は、全て「心・心地」等が乱れるという場合にのみ用いられている。下二段活用の用例にも「心が乱れる」という用法はあるので、絶対的ではないが、寢覚の場合、非常に狭い範囲で保守的な四段活用が残っていたと考えられる。

また「忘る」には、四段活用の用例が二例あるが、この二例は何れも未然形で下接語が助動詞「る」である。同時代の他作品をみても、四段活用の用例は全て未然形で「る」に統一しているから、平安期には「忘るる」の形が定着したと考えてよい。

N
MV

レシ希身を更に存強するものてある。

第二節 活用形について（略）

第三節 音便形について

動詞の音便形が文献に現われるのは、一般に平安初期以降だと言われる。

寢覚に用いられている音便形の数を示すと、連用形イ音便が一七〇例（四段一六九例、サ変一例）、連用形ウ音便が五例（四段）、撥音便が七八例（四段連用形一例、ラ変連体形七七例）である。

ここでは、これらの音便形のうち四段活用の連用形から音便しているものを中心に考察したい。四段活用の音便形は八四語一七五例である。この数値から、次の式で音便率を算出すると、

音便率 =

音便形数 ÷ 語数

略便形数 ÷ 語数 + 連用形数 ÷ 語数 (非音便形)

X 100

<表5> 音便率比較表

	音便形	連用形	音便率%
竹取	4	611	0.65
土佐	4	237	1.66
伊勢	13	681	1.87
大和	43	1,786	2.42
源氏	506	22,399	2.25
枕	28	3,049	0.91
更級	17	631	2.62
寢覚	175	3,753	4.46

寢覚は、四、四六%という音便率が得られる。この数値を江口先生の調査された七作品と比較すると表5の通りである。

表5によれば、寢覚が非常に高い

音便率を示している事がわかる。次点の大和物語の二、四%の約二倍の音便率である。

しかし、この数値は音便しない行を含めた音便率であるから、次にイ音便をするカ、ガサ行の音便率を先と同様に算出すると、一三、二%（サ行のみでは一六、八%）の数値が得られ、江口先生の調査された源氏物語の四、五%という数値の約三、四倍の比率を示しているのである。

次に音便形がどのような語に続いている時に生じているのかを調査すると、イ音便の場合、下接語には「て・給ふ・たり・奉る」等が挙げられ、助動詞「き」の活用形「し・しか」に続く三例を除いて全て、タ行音で始まる語に続いている。

次にウ音便についてみると、ウ音便は「思ふ」一語で五例見られる。この五例は全て下二段活用形の「給ふ」に続いている。従つて、寢覚に於いては、ウ音便はまだ限られた用法しかないと言える。

四段活用連用形の音便には、以上のイ音便ウ音便の他に、もう一例、撥音便がみられる。

一般に、平安時代の和文には撥音便は見えないとされている。源氏物語に一例あるが、これは漢文訓読の朗誦の部分であり、また土佐日記の一例も男性の手に成るものであるからとされている。

寢覚に於いても撥音便はこの一例だけで、他には例がないのであるが、この作品の場合、源氏の例のように訓読の用法でもなく、主人公の様子を述べる地の文である。また、

この部分は、他の写本にも校異はない。従つて、この事実から、純粋な和文に撥音便の例がないという説は否定されなければならぬ。

さて、連用形の用例には、もう一例特殊な音便形が存在する。それはサ変の連用形「おはし」がイ音便化したものである。

一般にサ変には音便形はないとされている。しかし、音便が起こるのが、両母音にはさまれたK・G・Sが脱落する現象であるとすれば、*owasi*が*owai*（*はこーおはひ）に転じても良い訳である。また、この用例の下接語が「たる」で、前に述べたタ行音である事からも音便化の条件は整つていると言えよう。しかし、他のサ変で同様の条件が整つているものに音便化の現象がみられないのであるから、この用例は、写本の書写の際、サ行四段活用連用形のイ音便と同じ感覚で音便化して書写されたのではないかと推測される。しかしながらなお、この用例及び先の撥音便の用例については今後の研究の余地を残していると考えらる。

第四節 使用度数と主要語彙

動詞の使用度数分布を調べると、使用度数六一回以上の三六語で、延べ語数五、九八六語に及び、全動詞の約四三%を占めている。

それでは、実際にはどのような語が多く用いられているのであろうか。次に動詞の主要語彙上位三〇語を表6①②として示した。また、比較のために、寿岳氏の調査による

<表 6 ②> 動詞主要語彙表

順位	古本説話集			順位	夜の寝覚		
	語	度数	%		語	度数	%
1	言ふ	270	20.8	1	あり	1,046	25.6
2	あり	250	19.2	2	はべり	546	13.4
3	す	220	16.9	3	す	527	12.9
4	思ふ	160	12.3	4	おもふ	509	12.5
5	見る	150	11.5	5	見る	461	11.3
6	成る	116	8.9	6	おぼす	363	8.9
7	参る	100	7.7	7	言ふ	259	6.3
8	申す	87	6.7	8	おぼゆ	190	4.7
9	候ふ	72	5.5	"	きこゆ	190	"
10	よむ	60	4.6	10	成る	188	4.6
11	見ゆ	54	4.1	11	参る	182	4.5
12	知る	52	4.0	12	知る	161	3.9
"	来	52	4.0	13	のたまふ	151	3.7
14	食ふ	41	3.1	14	聞く	149	3.7
15	取らす	37	2.8	15	見ゆ	132	3.2
"	造る	37	"	16	渡る	130	3.2
"	取る	37	"	17	おはします	105	2.6
18	居る	36	2.8	18	出づ	103	2.5
19	思ゆ	35	2.6	19	おはす	85	2.1
20	のぼる	34	2.5	20	申す	80	2.0
21	おはします	32	2.5	21	おぼしめす	75	1.8
"	聞く	32	"	"	さぶらふ	75	"
"	返る	32	"	23	もてなす	74	1.8
"	失す	32	"	"	ものす	74	"
25	入る◀四▶	31	2.3	25	さり(然)	67	1.6
"	出づ	31	"	26	しのぶ	64	1.6
27	仰せらる	30	2.2	27	きこえさす	57	1.4
28	問ふ	29	2.2	28	ごらんず	56	1.4
29	行く	28	2.2	29	かく(掛懸)	52	1.3
30	出でく	27	1.7	"	まかづ	52	"

用法でもなく、主人公の様子を述べる地の文である。また、
 として示した。また、比較のために、寿岳氏の調査による

<表 6 ①> 動詞主要語彙表

順位	源氏物語			順位	落窪物語		
	語	度数	%		語	度数	%
1	あり		22.5	1	す	599	22.0
2	す		14.0	2	あり	578	21.2
3	思ふ		12.7	3	言ふ	504	18.5
4	見る		9.5	4	思ふ	500	18.4
5	おぼす		9.2	5	宣ふ	412	15.1
6	きこゆ		8.2	6	見る	282	10.4
7	いふ		6.2	7	侍り	175	6.4
8	はべり		6.0	8	聞ゆ	166	6.1
9	のたまふ		5.4	9	おはす	163	6.0
10	成る		4.9	10	思す	158	5.8
11	見ゆ		4.4	11	成る	130	4.8
12	おぼゆ		3.8	12	申す	129	4.7
13	まゐる		3.5	13	聞く	125	4.6
14	おはす		3.4	14	参る	120	4.4
15	知る		3.2	15	知る	112	4.1
16	聞く		2.9	16	出づ	89	3.3
17	附・着く		2.8	17	臥す	72	2.6
18	ものす		2.6	〃	覚ゆ	72	〃
19	おはします		2.2	19	取る	70	2.6
20	出づ		1.9	〃	斯かり	70	〃
21	渡る		1.8	21	立つ<四>	68	2.5
22	さぶらふ		1.8	22	奉る	67	2.5
23	もてなす		1.6	23	渡る	66	2.4
24	すぐす		1.4	24	笑ふ	65	2.4
25	まさる		1.3	25	書く	58	2.1
26	書く		1.2	26	居る	55	2.0
27	思ひ出づ		1.2	27	見ゆ	54	2.0
28	入る		1.1	28	仕うまつる	51	1.9
29	すぐ		1.1	29	入る<四>	50	1.8
30	ふ(経)		1.0	30	然り	48	1.8

＜順位＞
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30

＜表7＞ 上位30語の共通語

作品	共通語	語数
寝覚と落窪	あり・はべり・す・思ふ・見る・おぼす・言ふ・おぼゆ・きこゆ・成る・参る・知る・のたまふ・聞く・見ゆ・渡る・出づ・おはす・申す・さり	20
寝覚と源氏	あり・はべり・す・思ふ・見る・おぼす・言ふ・おぼゆ・きこゆ・成る・参る・知る・のたまふ・聞く・見ゆ・渡る・おはします・出づ・おはす・さぶらふ・もてなす・ものす	22
寝覚と古説話	あり・す・思ふ・見る・言ふ・おぼゆ・成る・参る・知る・聞く・見ゆ・おはします・出づ・申す・さぶらふ	15
寝覚と落窪・源氏	あり・はべり・す・思ふ・見る・おぼす・言ふ・おぼゆ・きこゆ・成る・参る・知る・のたまふ・見ゆ・渡る・聞く・出づ・おはします	18
寝覚と落窪・古本	あり・す・思ふ・見る・言ふ・おぼゆ・成る・参る・知る・聞く・見ゆ・出づ・申す	13
寝覚と源氏・古本	あり・す・思ふ・見る・言ふ・おぼゆ・成る・参る・知る・聞く・見ゆ・おはします・出づ・さぶらふ	14
四作品	あり・す・思ふ・見る・言ふ・おぼゆ・成る・参る・知る・聞く・見ゆ・出づ	12
寝覚のみ	おぼしめす・しのぶ・きこえさす・ごらんず・掛く・まかつ	6

源氏物語、江口先生の調査による落窪物語、山内氏の調査による古本説話集の上位三〇語を並列して表示した。
 この表を見ると、寝覚は、同じ物語ジャンルの源氏、落窪と非常に似た上位語を持っている。一方、古本説話集とは共通語が少ない。
 次に上位三〇語までのうち、それぞれの作品との共通語をみると、表7の通りである。

この表からも明確なように、三〇語のうち二二語は源氏と共通しており、落窪とも二〇語の共通がある。それに対し、古本説話集とは、半数の一五語しかないのである。
 さて、共通語とは逆に寝覚にのみ現われる語が六語挙げられているが、このうち寝覚の特色が見られるものについて考察する。
 この六語の中で特に注目されるのは、「おぼしめす・き

<表8> 名詞主要語彙表

順位	語	度数	%	順位	語	度数	%
1	こと(事)	773	18.9	26	けはい	75	1.8
2	ひと(人)	607	14.9	27	君	74	1.8
3	ところ	520	12.7	28	夜	73	1.8
4	程	351	8.6	29	昔	72	1.8
5	けしき	268	6.6	30	それ	69	1.7
6	心地	256	6.3	31	なか(中)	68	1.7
7	者・物	238	5.8	32	ところ	67	1.6
8	様	237	5.8	33	ふみ(文・書)	66	1.6
9	方	234	5.7	34	おまえ(御前)	64	1.6
10	さま(様)	233	5.7	"	こよひ	64	"
11	よ(世・代)	210	5.1	36	ひとびと	63	1.5
12	今	202	4.9	37	限	62	1.5
13	身	193	4.7	"	目	62	"
14	我	174	4.3	"	折	62	"
15	うへ(上)	139	3.4	40	契	61	1.5
16	うち(内・中)	137	3.4	41	例	58	1.4
17	殿	132	3.2	42	おとど	56	1.4
18	有様	131	3.2	43	だいなごん	54	1.3
19	まま	120	2.9	44	夢	52	1.3
20	これ	116	2.8	45	せうしやう	51	1.2
21	姫君	101	2.5	46	をんな	49	1.2
22	何	99	2.4	47	けふ	48	1.2
23	宮	93	2.3	48	顔	47	1.2
24	後	83	2.0	"	月	47	"
25	なみだ	82	2.0	"	にふだふどの	47	"

「こえさす」の二語である。この二語は何れも敬語「おほす・きこゆ」の敬意を更に深めたものである。源氏物語では、この二語のうち「おほしめす」は五九語(0.09%)、「きこえさす」が複合語で二〇語(0.28%)である。

この比率を寢覚の「おほしめす」1.8%、「きこえさす」1.4%と比べるとかなり低い事がわかる。また、「おほす・おほしめす」に限って見ると、寢覚では「おほす」の四分の一の割合で「おほしめす」が使用されているのに対し、源氏

<	順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

では三〇分の一にすぎないのである。

一般に源氏物語では、二重尊敬は帝階級の人へのみ用いられているとされている。しかし、寢覚では「おぼしめす・きこえさす」が帝を初めとし、主人公中納言（大納言）、寢覚上、女主人公の父入道、兄の宰相等に対してまで用いられている。

つまり、「おぼす・きこゆ」に限って言えば、源氏物語よりも敬語の使用範囲が広いと言える訳である。

第三章 名詞及び形容詞の語彙

第一節 名詞について

寢覚に使用されている名詞の語数は、異なり語数一、八〇六語、延べ一四、六八七語である。

名詞の主要語彙五〇語を列挙すると表8の通りである。この表からは、「けしき・心地」等の語が上位に位置して

いる事から心理描写の言葉が多いと考えられる。また、ここには掲げなかつたが、大野晋氏がまとめられた一〇作品の基本語彙表の名詞と比べれば、心理描写の語が多く、自然描写の語が少ない事が明瞭である。更に、「なみだ・契・夢」等の語が上位進出している事がわかるが、これは心理描写の語と共に、寢覚の主題を暗示していると考えられる。

第二節 形容詞について

形容詞は、異なり語数四二〇語、延べ四、六六五語の語数を持つ。

動詞と同様に形容詞の連用形ウ音便について音便率を調べると、1.8%で、北原保雄氏の調査による源氏物語の29.5%、枕草子の54.0%等に比べると非常に低い数値を示している。主要語彙は表9に示す通りであるが、この表からも「く

<表9> 形容詞主要語彙

順位	語	度数	%
1	なし(無・亡)	456	11.2
2	いみじ	420	10.3
3	よし	97	2.4
4	くるし	84	2.1
5	心ぐるし	73	1.8
6	憂し	72	1.8
7	あさまし	71	1.7
8	心憂し	67	1.6
9	あやし	66	1.6
10	かなし	64	1.6
11	ふかし	64	1.6
12	くちをし	63	1.5
13	うれし	57	1.4
14	かぎりなし	57	1.4
15	わりなし	56	1.4
16	近し	55	1.3
17	めでたし	54	1.3
18	いとほし	51	1.2
19	いたし	49	1.2
20	おぼつかなし	49	1.2
21	はづかし	47	1.2
22	あさし	45	1.1
23	こころやすし	44	1.1
24	さりげなし	44	1.1
25	よろし	44	1.1
26	おなじ	43	1.1
27	多し	41	1.0
28	うらめし	39	1.0
29	をかし	37	0.9
30	わびし	35	0.9

るし・心苦し・憂し・あさまし・心憂し・くちをし」等、心痛を表現する語の上位進出が目立つ。つまり、名詞の場合と同様、寢覚の主題意識が知れる訳である。

結 論

以上、「夜の寢覚」の語彙量の調査、並びに動詞を中心に名詞、形容詞に亘つての主要語彙及び語法の調査によつて、夜の寢覚の語学的考察を試みてきた。

夜の寢覚は、自立語の異なり語数五、〇〇五語、延べ四四、〇九三語の語数を持つている。

この作品は、成立年代未詳とはいへ、「源氏物語」の踏襲による平安中期以降の作品であることには違いない。従つて、主要語彙及び語法の面から見ても特に際立つた特徴は見受けられない。しかしながら、使用されている語の品詞百分化（異なり語数）、及びNとMVRとの調査並びに考察によつて、この作品が、源氏物語以上に物語的な緻密な描写がなされていることが明確になった。

また、作品を読んでも強く感じる事であるが、各品詞の主要語彙を分析・考察すると、心理描写の細やかさが如実に現われている。また、草木類等の語彙が極端に少ないことから、自然描写よりも、登場人物の心理を描こうとする作者の主題意識が明確になっている。

以上、二点から源氏物語を踏襲しながらも主題をより明確に絞つて、揺れ動く女性心理を描こうとした作者の執筆態度が窺えるのである。しかしながら、この事は逆に言えば、

「書こうと思う事しか書いてない」という技巧を凝らしていない直接的な文章であるも言えよう。

動詞についてみると、平安中期には奈良時代の四段活用二段化する傾向が現われている。この作品に於いては、一部ではあるが、「乱る・忘る」に古い活用の型（四段活用）が残っている。しかしながら、この用法は非常に限られた場合にのみ用いられている。

このように、古いものが残っている一方では、音便形が他作品に比して高い比率で起こっている。また、女流文学では用いられる事が殆どない撥音便が一例ではあるが存在しており、著者の調べた限り他作品には存在しないサ変の音便現象も一例見られる。

音便現象だけをとりあげて、作品を特徴付けるのは無謀であるが、このような謂わば異例の音便現象が現われていることは、源氏物語周辺の物語類の中では一つの新しさと言えるであろう。

「新しさ」ということは、敬語の使用範囲が広くなっているという点からも裏付ける事ができるのである。

語学的な調査、分析のみで作品を絶対的に規定する事は無理であるが、このように一作品の語彙、語法を次第に明らかにしていく事が、作品理解の一つの基礎研究となり、ひいては、その時代の語彙、語法を体系付ける大きな基盤となるものであると考える。

